2018年2月3日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第2章41～50節

・引用：第3章36,37節、第16章21節、第14章7節、第2章62,63節

 先月はパーパ(罪)について話しました。

『バガヴァッド・ギーター』にはいくつかのアイデアが出てきますが、パーパもそのうちのひとつです。このパーパはそれと対立するプンニャという言葉とセットになっています。

**パーパ(Papa:罪)　　－　 プンニャ(Punya:善)**

ヒンズー教だけでなく他宗教にもこの「罪と善」というアイデアはあります。

我々は子供の頃から自分の家族や社会そして宗教を通して、この「罪と善」について学びます。

「～～すると罪を犯すことになる」と聞いてはいますが、何が本当に罪なのかについて、我々の理解は浅いことが多いのです。

なぜ罪を犯すのか、その結果どうなるのか、どうしたらその罪を取り除けるのか、について深く考えていません。

「罪」だけに限らず「宗教」「神」「魂」「心」などのアイデアも、言葉としては知っていてかつそれについての話を聞いてはいるのですが、それが本当は何なのかについて深く考え理解している人は少ないのです。

『バガヴァッド・ギーター』の中にはこれらのアイデアについて、とても深い教えが含まれています。

聖典を学ぶ理由のひとつはそれが実際に我々の人生の助けとなるからですが、もうひとつの目的は我々の上記のアイデアに対する理解を深めることです。

「知りたい、深く理解したい」という皆さんの知的欲求に応えることも、この勉強会の目的です。そして『バガヴァッド・ギーター』のアイデアの中でも重要なもののひとつが、今日のテーマである日本語で「罪」、サンスクリットではパーパ、英語でsinです。

この「罪」を別の日本語の「悪」と置き換えてもいいかもしれませんが、以後の説明では「罪」を使います。

前回説明したように「罪」を表すサンスクリットは パーパ 以外にも アガー(Agha)、ヴリジーナ(Vrijina)、ドゥーリタ(Durita)、などがあります。

『バガヴァッド・ギーター』以外のヒンズー教の聖典にもこの罪を表す言葉は出てきますが、この言葉が使われている例をいくつか挙げます。

**・ラーマクリシュナ讃歌**

我々の僧院の神はシュリ・ラーマクリシュナですが、彼は近代インドの最も有名な預言者です。直弟子のスワミ・ヴィヴェーカーナンダはラーマクリシュナについてベンガル語の讃歌を作りました。(カンダナ バヴァ バンダナ：Khandana Bhava Bandhana)

我々は毎日夕方その讃歌を歌いますが、協会に来られた方の中にはご存知の方もいらっしゃると思いす。*(スワミがその一節を歌う)*

いま歌った中にモーチャナ アガドゥーシャナ(mocana aghadūṣaṇa)というフレーズが出てきましたが、ここにも罪を表す アガー という言葉が出てきます。モーチャナは「取り除く」という意味で、ラーマクリシュナの恩寵で罪が取り除かれることを表しています。

**・ガンガー讃歌**(Devi Suresvari Bhagavati Gange)

インドで一番神聖な河はガンジス河であり、ヒンズー教徒はガンジス河の水でいろいろな罪が取り除かれると信じています。聖ガンジス河の讃歌もあります。*(スワミがその一節を歌う)*

ここにもガンジスによって取り除かれるものとしてローガム(病気:rogam)、ショーカム(悲しみ:sokam)、ターパム(困難:tapam)、パーパム(罪:papam)と列挙されている中に罪があります。

ガンジスの女神の力でこれら4つに加えて間違った考えも取り除いてください、というのが讃歌の内容です。

**・太陽神讃歌**(Japa Kusuma Sankasam)

日本の方は太陽が好きで、太陽は日本という国のシンボルであり、国旗にも描かれています。

インドでも太陽を礼拝し、讃歌もあります。

ヒンズー教徒が川で沐浴する時このマントラを唱えます。*(スワミがその一節を歌う)*

「ハイビスカスのように真紅で、聖者カッシャペの息子であり、明るく輝き、罪と暗黒の破壊者である太陽よ！私は毎日夜明けをもたらしてくれるあなたに敬礼します」というのがその意味です。ここにもパーパグナム(Papaghnam)という形で「罪」が出てきます。

ヒンズー教の伝統において「罪」が大変重要なアイデアであることを示すために、以上三つの例を挙げましたが、ヒンズー教だけでなくキリスト教の聖書にも「罪」についての記述が多くあります。

中でもマグダラのマリア(Mary Magdalene)のエピソードは特に有名です。

姦淫の罪を犯したという理由で、民衆はマリアに石を投げつけようとしていました。

イエスが、「あなたたちの中で罪を犯したことのない人が、まずこの女に石を投げなさい」と言うと、マリアに石を投げつけようとする者は誰もなく、人々はその場から立ち去りました。

一人残ったマリアにイエスは、「これからはもう罪を犯してはいけない」と言いました。

のちに彼女はイエスの直弟子になりました。

仏教やイスラム教にも罪のアイデアはありますし、我々は皆個人的にも「罪を犯さないようにしよう」と考えます。

カルマという言葉は最近では多くの日本人が知るようになりました。

本来カルマには良いカルマと悪いカルマの両方があるのですが、日本では「自分が苦しむのはカルマのせいだ」のように、もっぱら悪いカルマの意味でカルマという言葉が使われています。

悪いカルマと罪は同じです。悪いカルマの結果罪を犯し、罰を受けます。

古い時代に限らず、また聖典の中だけでなく、現代に生きる我々ひとりひとりもまた罪というアイデアを持っています。

日々の生活において罪を意識する場面はありますし、潜在意識の中にも罪の意識はあります。

しかし罪とは何かについて、我々は深く理解してはいません。

今日の講話のテーマは「罪とは何か」であり、それを理解することで今後罪を犯さないようになることが目的です。

罪とは何かについての皆さんの知的興味に答えるためだけではなく、罪を犯さないためには何に気を付けなければならないのかを知ってもらうために、これから罪についてお話しします。

これからの話を聞こうという気持ちが皆さんに起きるように、前置きの説明をしました。

さて、まず「罪とは何か」です。皆さん、罪とは何でしょうか？

ヒンズー教による罪の定義ではなく、皆さんの考えを聞かせてください。

参加者：やってはならないこと。人を傷つける、盗む、嘘をつく、貪るなどのこと。

それは罪の具体例です。どうしてこれらが罪になるのですか？　罪とは何ですか？

他人の金を盗んで自分の懐が豊かになることは、どうして罪なのですか？

おまわりさんに捕まるのは怖いことですが、誰も見ていないこともあります。

私が例会で聞いて覚えている例があります。

夜遅くの電車に乗客がＨ先生ともう一人の二人だけということがありました。

座席に封筒の落し物があり、中には高額なお金が入っていました。

もう一人の乗客はＨ先生に「届けずにこっそり二人で分けよう」と提案しましたが、もちろんＨ先生は断りました。

その場にはもちろん警察官はいませんでしたが、他に乗客が誰もおらず自分一人だけがその落とし物を見つけるということもあり得ます。

その場合でも、「これを盗ってはいけない！」という声が心の中に起こりませんか？

その声は誰の声でしょうか？

それは皆さんが持つ良心の声であり、皆さんの中から出てくる声です。

皆さんは子供の頃から、家族、社会、学校の教師、本などから学ぶことで、潜在意識の中に良心が形成されます。では良心の源はなんでしょうか？

他者の教えを受けて初めて良心が生まれるのではなく、もともと我々の中に良心の素地があるのではないでしょうか。だとしたらその源はなんでしょうか。

良心の源はアートマン(内なる自己、魂)であり、さらにその源はブラフマン(神)です。

**神は皆さんの中に魂の形で存在しており、その魂の声が良心です。**

良心は「何が正しく何が正しくないか、何が道徳的で何が非道徳的か」を知っています。

そしてそれは両親の教育、社会の伝統、学校教育、読書などが加わって総合的に形作られるのですが、ここで「正しい－正しくない」(善と罪)の基準について少し詳しく分類してみます。

**①宗教的戒律** (religious law)

**②道徳的規範** (moral law)

**③社会的慣習** (social law)

国の法律(country law)と上記三つの基準は必ずしも一致しません。

これから「罪を犯す」と表現する時、それは法律違反の意味ではありません。

日本語では罪と犯罪を厳密に区別しないかもしれませんが、罪はもともと聖典(宗教)のアイデアであり、罪(sin)と犯罪(crime)や違法(illegal)とは違うものとしてお話ししています。

国の法律には違反していなくても、宗教的観点からは罪とみなされることは多々あります。

たとえば自分に財力がありながら老いた父母の面倒を見ないのは、法律違反ではなくても間違いなく罪です。この点を理解していないと混乱します。

宗教的戒律から見た罪について言えば、何が罪でありまた罪でないか、宗教が違っても共通する場合もあれば、宗教によって異なる場合もあります。

宗教的戒律の例を挙げれば、イスラム教ではラマダンの期間中は朝から夕方までの日中は何も口にせず断食し、夕方になって初めて食事が許されます。

イスラム教徒がこれに違反して食事を取ると、罪を犯したとみなされます。

道徳的規範の例は皆さんもよくご存知ですが、「嘘をつく」などが罪に当たります。

社会的慣習の違いを挙げるなら、たとえば西欧社会や、インド、日本などは一夫一妻制ですが、アラビア圏では一夫多妻が認められています。

逆にチベットでは一妻多夫の習わしがありますが、これには女性の数が少ないという事情があります。

宗教ごとの戒律の違いについて、もう少し話します。

ヒンズー教では雌牛を殺すことは罪ですが、イスラム教では問題ありません。

いっぽうイスラム教では牛肉は問題ありませんが、豚肉を食べることは許されません。

食物規定も宗教によってバラバラです。

ヒンズー教の考えでは学問の女神はサラスワティ(弁天)です。

本は学問のシンボルであると考えられているので、その本にもし足で触れてしまうとサラスワティは怒り、ヒンズー教では罪になります。

ヒンズー教徒でない人間は足で本に触ったとしても、それほど深刻な事だとは考えません。

宗教によって罪のコンゼプトは相対的です。

社会的慣習も時代によって変化し、以前は許されなかったのに現代では問題視されなくなっていることもあります。

結婚していない男女が同居することは昔は問題でしたが、現代では誰も気に留めません。

このように罪の概念は宗教や時代によって変化するので固定していないと言えますが、中には宗教の違いや時代を超えて共通した罪のアイデアもあります。

たとえば、嘘をつく、盗む、姦通、殺人、などはいつでもどこでもほとんど例外なく罪とされています。

もう少し限定するなら、賄賂、年老いた親の面倒を見ない、アルコールを飲む、誓いを破る、などもすべてとは言わないまでも、かなり多くの宗教で共通して罪とみなされています。

罪を犯すとその結果罰を受けることになりますが、この罰についてのアイデアも聖典の中にあります。

私は子供の頃罪を犯すとどうなるかを説明する絵、つまり地獄絵図を見たことを覚えています。

嘘をついたために舌に剣を刺されている人、大きな鍋に煮えたぎった油で魚のフライのように揚げられる人、毒蛇がうじゃうじゃいる群れの中に投げ込まれる人、たくさんの御馳走を目の前にしながら口を針の先のように小さくされて何も食べられない生前食い意地のはっていた人、などいろいろありました。皆さんはこのような絵を見たことはありませんか？

日本人で見たことのある人はあまり多くないようですね。

本当にこのような地獄があるのかどうかわかりませんが、我々に罪を犯させないようにするための戒めとして、これらの絵が存在するのです。

地獄があるかどうかわかりませんが、罪を犯した結果我々が生きている間に数々の苦しみ、悲しみを経験することは間違いありません。

そしてこの苦しみ、悲しみは今生だけで終わらず、来世も続く可能性があります。

他人からたくさんのお金を盗み、嘘をつきながらもその報いを受けることもなく、平穏に一生を終える人もいます。

しかし犯した罪に対する罰を免れることは決してあり得ず、来世で苦しむことになります。

そしてその時になって、「私がこんなに苦しむのは前世でよほど悪いことをしたからに違いない」と自分のカルマを恨むのです。罰を避けることはできません。

法律違反を犯せば国から罰せられますが、法律違反していなくても宗教的、道徳的、社会的な罪を犯すと、その結果苦しむことになります。

そしてその苦しみから逃れるために皆さんはスピリチュアル・ヒーラーのもとに駆け込みますが、それはやめたほうがいいというのが私の意見です。

彼らは金銭目的でカウンセリングをするのであり、彼らの言っていることが正しいかどうか確かめられません。

しかし大事なのは、スピリチュアル・ヒーラーの言うことはあてにならなくても、今生の苦しみ、悲しみの原因が前世の悪いカルマにある、という可能性は否定できないということです。

宗教的、道徳的、社会的な罰、およびその結果である苦しみ、悲しみ以外のもうひとつの罰が後悔です。皆さんも経験があるのではないでしょうか。これも地獄です。

形のある罰ではなく、他人には分かりませんが、皆さんの心の中にははっきりあります。

他人は知らなくても自分がしたひどい過ちが忘れられず、死ぬまで一生続く後悔もあります。

他に地獄があるかどうかわかりませんが、この後悔は確かに地獄であり現実的な話です。

これからどのように罪を取り除くかについてお話しするわけですが、なぜ罪を取り除かなければならないのかと言えば、今説明したように罪を犯した結果苦しみ、悲しむことになるのでそれを避けるためです。

貧困、愛する人の死、病気、人間関係、など苦しみ、悲しみにはいろいろあります。

意図的に罪を犯す人もいないわけではありませんが、大部分の人は犯したくないのに罪を犯してしまいます。

皆さんは罪を犯すのはよくない、後に苦しみが待っている、と知っているので罪を犯したくないのですが、自分の意志に反して罪を犯してしまうことを怖れています。

自分にいつ苦しみ、悲しみが待ち受けているのかわからないので不安です。

罪をどうしたら取り除けるのか、その方法については聖典に数多く書かれています。

ここでヒンズー教の罪についての興味深い定義のひとつを紹介します。

**神に近づくすべての行為は善であり、反対に神から遠ざかるすべての行為は罪である**

とても素晴らしい定義です。

神は別の言葉で言えば真理であり、神と真理は同じものと考えてください。

真理は最高の価値をもつものであり、真理に近づくすべての行為は善であり、真理から遠ざかる行為は悪なのです。

嘘をつく、盗む、暴力をはたらく、これらはすべて神＝真理から離れる行為であり、真理に覆い(カバー)を被せる行為です。

嘘をつくと真理に一枚カバーを被せ、盗みを働くとさらにもう一枚カバーを被せます。

殺人を犯すとさらに分厚いカバーを被せることになります。

罪を多く犯すことは真理に何枚もカバーを被せることです。

**罪とは真理を覆い隠すものである**

この観点から罪というものを考えてください。

聖典にも社会にも罪の基準はありますが、我々の目的は真理を悟ることです。

我々が勉強している『バガヴァッド・ギーター』には真理について書かれています。

しかし我々が真理を覆い隠してしまう罪を犯していたら、真理＝神を悟ることはできません。

普通の人は苦しみ、悲しみを経験するから罪を犯さないようにしようと考えますが、より高いレベルの人は罪を犯すことで無知が増大し、真理を悟ることが出来なくなるので罪を犯すまい、と考えます。

パタンジャリが『ヨーガ・スートラ』の中で、ヤマ、ニヤマ、について教えているのもこのためです。心や感覚がきれいにならなければ、サマーディは不可能です。

苦しみ、悲しみが嫌だから罪を犯さないようにしようというのは、罪を避ける動機としてはどちらかと言えば消極的です。

もっと前向きな考え方は、「私は至福が欲しい、平安が欲しい、だから罪は犯さない！」です。

嘘をついたり、盗んだり、犯罪に手を染めたりしていては、幸せ、平安、至福、悟りは不可能です。「神に近づく行為は善、遠ざかる行為は罪」は、より高い目的意識を持つ人のための深い洞察に富んだ定義であり、この基準に照らし合わせてどう行動すべきか判断してください。

どうして我々は犯したくないのに罪を犯してしまうのでしょうか？

**罪の原因**について考えてみましょう。

アルジュナもシュリ・クリシュナに同じ質問をしました。

「師よ！人間は罪を犯したくないという自分の意志に反して、何者かに駆り立てられるように罪を犯してしまい、その結果苦しみます。何故でしょうか？」

これは人間の悲劇ではないでしょうか？

『バガヴァッド・ギーター』のアルジュナのこの疑問は、3千年後の我々にとっても切実な問題ではないでしょうか？　古典である『バガヴァッド・ギーター』は現代でも色褪せません。

人間の性質(human nature)、心の性質は昔から変わりません。第3章36節を見てください。

***アルジュナが問います。『おお、ヴリシュニ族の子孫であるクリシュナ様！　人は自分の意志に反し、つい罪深い行動をとってしまうことがありますが、これはいったい何の力によるものなのでしょうか？』と。//3-36***

すぐ次の節にシュリ・クリシュナの答えがありますが、それを見ないで皆さん個人の意見を聞かせてください。

参加者:人間は不完全だから

参加者:マーヤーのせいで

参加者:悪霊にとりつかれているから

キリスト教にも悪魔のコンセプトがあり、それはヒンズー教のマーヤーと共通する部分もありますが、もう少し詳しく具体的に考えてみましょう。

我々は意識的にも、また無意識でも罪を犯すことがあります。

この無意識で罪を犯してしまう原因を、サムスカーラというアイデアを用いて説明することができます。**サムスカーラは傾向**という意味です。

人間は以前に何度も悪い行いをしていると、潜在意識の中にあるサムスカーラのせいで、再び悪い行動を取ってしまう可能性があります。

もちろんサムスカーラには良いものと悪いものの両方があるのですが、今は罪について話しているので、ここでは悪いサムスカーラの意味で使っています。

我々が前世、今生で悪い行為をすると、それがたった一度だったとしても心の中に種のような形で残ります。そして後になって種が芽吹くように、再び同じ悪い行為をする可能性があります。これが無意識で罪を犯してしまう理由です。

前世で経済的な理由から何度も盗みをはたらいた人がいるとします。

お金に困ってというのは盗みの理由としてはありがちですが、その人が現世に生まれ変わって今生では経済的に何も不自由していなくても、以前のサムスカーラは残っています。

私が覚えているエピソードをお話しします。

私が大学生の頃、4人相部屋の寄宿舎生活でした。

入寮してからしばらくして、私も含めた同じ部屋の学生のお金がなくなっていることに気づきました。一年ぐらい経って同じ部屋の学生のうちの一人が、他の3人のお金を盗んでいたことが判明しました。

この話で注目すべきなのは、その盗みをはたらいた学生の家庭は裕福であり、彼自身もお金に困ってはいなかったということです。

本当はお金を必要としていないのに、サムスカーラのせいで盗みを働いてしまったのです。

無意識に罪を犯す原因としてはサムスカーラが考えられるということを話しましたが、もうひとつの罪の原因について37節を見てください。

***至高者が答えられます。『その力とは、人間生来(プラクリティ)のラジャスの性質から生じる欲望と憤怒の心から出てくるもので、人を狂わせ罪を犯させる最大の敵である。//3-37***

**罪の原因はラジャグナ(ラジャスの性質)から生まれる欲望と怒りである**、と説明しています。

ここでカーマ(Kama)という言葉は広い意味では欲望ですが、限定的な意味では肉欲のことです。

同じ言葉が二つの意味で使われるので、文脈から判断しなくてはいけません。

クローダ(Krodha)は怒りです。

シュリ・クリシュナは罪の原因について、別の説明もしています。第16章21節です。

***人間の魂を堕落させてしまう地獄への門が三つあるが、肉欲、怒り、貪欲がそれである。それ故、正気の人間は、この三つを捨てなければならぬ。//16-21***

カーマは肉欲と訳されていますが、ここではカーマ、クローダに加えてはローバ(貪欲:Lobha)が挙げられています。三つともラジャスを源としています。

もちろん「罪の原因はマーヤーである」という言い方も正しく、それはマーヤーの中には必ずトリグナ(サットワ・ラジャス・タマスの三性質)があるからです。

ただしマーヤーの持つ三つのグナのうちでも、罪の原因はラジャスであると特定しています。

マーヤーにも三種類ありますが、サットワは罪の原因ではありません。

罪の原因はマーヤーである、あるいは悪魔である、と言ってしまうと誤りではありませんが、厳密ではなく否定的な印象を与えてしまいます。

マーヤー(幻惑)にも人を神に向かわせるヴィディヤ・マーヤー(Vidya Maya)と、神から遠ざけるアヴィディヤ・マーヤー(Avidya Maya)の二種類があります。

ヴィディヤ・マーヤーは良いマーヤーでありサットワの性質で、アヴィディヤ・マーヤーはラジャス、タマスのことです。

三つのグナのうちラジャグナが罪の原因であり、それをマーヤーと言ってしまうとすべてのグナが罪に関係しているかのようであり、不正確な表現です。

シュリ・クリシュナは罪の原因はラジャグナである、とピンポイントで指摘しています。

もちろんタマスが罪の原因となることもありますが、ラジャスに比べるとその可能性は低いのです。タマスは不活発で鈍重な性質です。

罪を犯すためにもはたらかなくてはならず、石のように動かず怠惰で眠っているような性質のタマスは罪を犯しにくいのです。タマスの性質では良いことも悪いこともできません。

ラジャス的性質について我々が持つイメージは、活発、野心、嫉妬、暴力、競争、などです。

働くのはよいことですが、働き過ぎ(ワーカホリック:workaholic)はよくありません。

アルコール中毒(アルコホリック:alcoholic)と同じように仕事中毒です。

日本人はこの傾向があるので気を付けなければいけません。

働き過ぎはストレス、心配を生みます。

止まりたいのに止まれない、仕事から離れたいのに離れられないのです。

正月、ゴールデンウィークなど休みの日でも仕事をし、一秒たりとも仕事から離れられません。

休日を楽しむことができず、仕事がなければ自分から仕事を作り出します。これは悲劇です。

ラジャスのしるしについてお話ししましたが、ラジャグナとは何か、それが増大するとどうなるかについて、『バガヴァッド・ギーター』にすべて説明されています。

これを学ぶことはとても重要であり、自分の心がサットワ、ラジャス、タマスのいずれの状態にあるのか、チェックリストとして使えます。

日常の仕事にもチェックリストがありますが、自分の心が今サットワ、ラジャス、タマスそれぞれどれぐらいのパーセンテージで占められているのか、それを判断するためのチェックリストとして使える知識が、『バガヴァッド・ギーター』にはとても詳しく書かれています。

第14章7節を見てください。

***またラジャスは、情熱の性質であるが、欲求と執着の心を生じ、人を物質的利益のある仕事に縛りつけることを知るがいい。おお、クンティー妃の息子(アルジュナ)よ！//14-7***

ラジャスの性質として、情熱、欲求、執着、仕事による束縛、などを挙げています。

人間は多くの欲望を持っていますが、それを満足させるためには願うだけではだめで、自分から何かをしなければなりません。

棚から牡丹餅は不可能ですし、お金が欲しいと思えば空から雨のようにお金が降ってくるということもあり得ません。

欲望を満たすためには活動しなければいけませんが、ここが罪が生まれる出発点です。

働きを始めると競争が始まり、今よりもっと多くの収入を得たい、もっと名声が欲しい、と考え始めます。生活に必要なお金があればそれで十分とは考えず、もっとお金が欲しいという野心が生まれます。

他人の収入が自分より多いと嫉妬し、上司が自分より同僚のほうを重用すると嫉妬します。

**欲望　⇒　活動　⇒　競争　⇒　野心　⇒　嫉妬　⇒　ストレス**というのがラジャスの特徴ですが、このラジャスと罪とはどのような関係があるのでしょうか。

道徳的な方法で欲望を満足させているうちはいいのですが、欲望が大きくなり過ぎて道徳的な方法ではそれを満たせなくなった時が問題です。

道徳的な方法で収入を得ていたのに、もっといい服を買いたい、いい家に住みたい、車を買いたいという欲望を満たすために非道徳的な方法でお金を稼ぐ、というのはよくある話です。

こうなってしまうきっかけがカーマ(欲望)であり、カーマの別の姿がローバ(貪欲)です。

普通の人には「これぐらいで十分だ」という考えがありますが、貪欲な人の欲望には際限がありません。貪欲でなければ非道徳的な方法でお金を稼ごうとは考えません。

さらに先ほど言った嫉妬があります。

ある人が自分より人から好かれているとその人に対する嫉妬が生まれ、その人を傷つけたい、殺したい、嘘を流してでもその人を中傷したい、と考えるようになります。

このような例はいくらでもあり、皆さんもご存知なので説明の必要はないと思います。

この源はカーマであり、欲望あるいは肉欲のことです。多くの犯罪の原因はこのカーマです。

一人の女性を二人の男性が同時に好きになり、女性と結婚したい男性はもう一人の男性を傷つけよう、殺そうとします。

また結婚していながら自分の配偶者以外の相手を好きになる浮気が原因の犯罪も、現代では多くあります。カーマとカーマの別の形であるローバは、多くの罪の原因となっています。

ではクローダ(怒り)はどうでしょうか。

我々が欲望(カーマ)を満足させようとしたときに障害にぶつかると、そこで怒り(クローダ)が生じます。

ある人が自分の欲望を満足させるためには邪魔な場合、その人に対する怒りが生まれます。

怒りは心の中に留まらず、行動として現れます。

嘘をついて人を批判する、人に暴力を振るうなどの行為がそれです。

これらの原因は怒りですが、第2章62節に詳しく書かれているので見てください。

***感覚の対象を見、また思うことで、人はそれに対する愛着心が芽生え、またその愛着心によって欲望がおこり、欲望が遂げられないと怒りが生じてくる。//2-62***

先ほどの14章7節と同じくサンガ(sanga)という言葉が出てきますが、14章では「執着の心」、ここでは「愛着心」と訳されています。

あるものを好きになると、それを手に入れたいと考えています。

この欲望が生じるプロセスに注目してください。

突然あるものに対する欲望が起こるわけではありません。

何度も何度も対象のことを考えた結果愛着が生じ、手に入れたいという欲望が起こります。

あるものをまず好きになり、その後に手に入れたいという欲望が生じる、ということがはっきりと書かれています。

**対象を見る ⇒ 何度も想う⇒ 執着する ⇒ 欲しくなる ⇒ 叶わないと怒りが生じる**

次の63節ではとても興味深い説明がされています。

***その怒りによって迷妄が生じ、迷妄によって記憶が混乱し、記憶の混乱によって知性が失われ、知性が失われると、人はまたもや低い物質次元へと堕ちてしまう。//2-63***

「物質次元に堕ちる」と訳されているプラナシャティ(pranasyati)のひとつの意味は、「亡くなる」ということですが、ここでは肉体の死ではなく**霊的な死**を意味しています。

アートマンのレベルでの死 (spiritual death)であり、神＝真理から離れることです。

『バガヴァッド・ギーター』がどれほど素晴らしい聖典かわかりますか。

ただ「罪は良くない」と言うだけではなく、罪がどのようにして生じるのか事細かに説明しています。

何が罪か、どのようにして罪を犯してしまうのか、その結果どうなるのか、すべてについて詳しく書かれています。